

## 三浦市立病院地域医療科での研修を終えて（臨床研修医 足立詩織）

三浦市立病院 地域医療科での1ヵ月の研修が終わった。地域医療研修では、地域医療科で管理を行う内科入院患者の受け持ちや地域での訪問診療に同行して指導医の先生と一緒に診療に携わった。入院する患者は、心不全やCOPDなど慢性疾患の急性増悪や終末期の療養目的の入院であり、今までの研修で主に経験してきた急性期疾患の患者とは異なるアプローチが必要であった。急性期の場合、比較的治療方針は明確であり、治療により状態が改善して退院する場合が多い。しかし、今回受け持った患者の多くは、高齢で複数の疾患をもち、長期臥床により廃用が進み、家族の介護力不足や退院後の環境が整っていないなど様々な問題を抱えていた。そのため最初にこの研修で患者を受け持ったとき、どのように方針を立てていくべきかについて、自分自身では見当もつかなかった。それは今まで私が、病院からの退院をゴールと考えていたためだった。入院の原因となる疾患だけではなく、複数の疾患が組み合わさった病態を総合的に評価し、患者の認知機能や心理面なども含めて患者全体をみる視点、さらには家族や居住環境、社会資源など患者を取り巻く状況をみる視点がいかに重要であるかということに気付かされた。また、その全体像を理解し、対応するには医師だけでは到底不可能だということを知った。入院前の状態を詳しく知るためには訪問スタッフや施設スタッフ、かかりつけ医の情報が不可欠であり、入院中の患者の様子は患者と接する機会の多い病棟看護師やリハビリスタッフから、そして退院調節のために必要な情報や有効なサービス利用の方法等はメディカルソーシャルワーカーからの情報が必要となる。これらの情報を収集し、共有するためには職種間での連携が重要であり、積極的なカンファレンスの開催や、普段から互いに相談しやすい環境を作ることが大切だと感じた。今まで多職種連携が重要ということは言葉では理解しているつもりであったが、自ら実践しなければならぬと改めて感じさせられた研修であった。訪問診療では、患者さんの自宅や介護施設を訪問し、診察を一緒にさせていただいた。指導医の先生はいつも患者だけでなく家族にも寄り添った診療をされており、患者の状態や治療の話の後は必ず介護者である家族の体調を気遣っている姿が印象的だった。また、高齢者診療において内科の知識だけでなく、褥瘡や湿疹等の皮膚科の知識や、嚥下や栄養についての総合的な知識も要求されることを知った。訪問看護や訪問リハビリにも同行させていただき、具体的にどのようなことをしているか見学し、現場で話を聞くことができた。これらのサービスは今後さらに需要を増していくと考えられ、医師も自分には関係ないと考えずに地域医療に関する知識をつけ、患者に説明できるようになればいけないと思った。研修を通して、自分が地域医療や慢性期医療に関してどれほど無知であったかを実感した。地域包括医療というのは今後の医療の主軸になる考えであり、今後どのような病院で働いたとしてもそれを意識しながら診療に関わるべきだと感じた。

これまで見たこともなかった三浦半島の魅力をたくさん知ることができたことも、この研修がよかったと感じる理由のひとつだった。三浦市は海に囲まれた港町で、マグロ漁業が盛んなことで有名だ。とにかくマグロを中心とした魚介類はどれも絶品だった。休日や仕事終わりにマグロ料理の屋台がたくさん並ぶ三浦夜市に行ったり、職員バーベキューにも参加させていただき、本当に楽しく過ごすことができた。また、病院スタッフや地域の方々はとても温かく気さくな人ばかりで、離れた土地から研修に来た私を快く迎え入れていただき本当に嬉しかった。また機会があれば訪れたいと思える素敵な場所だった。

最後に、研修を受け入れてくださった小澤院長、兒玉先生を始めとする地域医療科の皆様、1ヵ月間大変お世話になりました。この研修で学んだことを活かせるよう、今後も精進していきたいです。本当にありがとうございました。